

火の手阻んだ励ました

木よ森よ②

ニッポン jinmyaku@asahi.com 人・脈・記



●浅山三郎さん(左)と河合節二さん ●河合浩彦さん



1995年1月17日未明。神戸市長田区で自治会の連合会長をしていた浅山三郎(73)は、激しい揺れにたたき起こされた。幸い、家族は全員無事だ。きしむ戸をこじ開けて外に出てみると、東に上がった火の手が古い木造家屋のみ込みながら近づいてくる。

近くの大國公園に逃げ、さらに西に避難した。公園と道を隔てた民家が次々に焼け落ちる。公園の十数本のクスノキが火の粉に包まれ、シルエトになった。あぶられていたのは2、3時間にも及んだろうか。やがて風向きが変わって、延焼は止まった。木々が火を食い止めたように見えた。

震災後、公園は炊き出しや集会の場所になった。仮設住宅を建てる計画は浅山らがとめた。「何もなくてもみんなが集まる。そういう場所なんやから」。集まる場所がなかったら、町の再建もできない。

河合節二(49)はその夏、公園で祭りを開く中心になった。「こんな時に？」という声には、「こんな時やから」と答えた。焼けた廃材で、だんじりを作り、更地のままの通りを子供たちが引いて歩いた。町に人を呼び戻したかった。その象徴が大國公園だった。

だが、クスノキは真っ黒く焦げた幹をさらしたまま。一年中緑の葉を絶やすことはないクスノキが、今は一枚の葉もつけずに立っている。まるで骨のようだった。

樹木医になったばかりの河合浩彦(67)は震災から4日後、被災地を回った。カメラは持って出たが、焼け跡に向かつてはシ

ャッターが押せなかった。だが、気になっていた木々は意外に元気だった。突き上げる揺れだったためか、横枝は折れていたものの、まっすぐな幹には被害が少ない。「災害に遭ったような顔をしていなかったのが救いだっただけ」

被災地を自転車で走るうちに感じた。一変した風景の中に見慣れた木が残っていると、ホッとす。心のよりどころになる。特にお年寄りには大きな支えになるはずだ。暴動も略奪もなく、整然と復興に向けて歩む住民たちを励ましているのは、焼け残った木ではないか。

河合はこげた幹や折れた枝の傷口に薬を塗り、根もとの土壌改良をして歩いた。ただ、木を生き返らせることは樹木医にもできない。木に生きようとする力があれば、それに手を貸してやれるだけだ。

クスノキはどれも3分の2が焼けた。駄目だろうと内心では思っていた。ところがその春遅く、二回りも小さくなったクスノキの、燃えなかつた側の枝に、小さな芽が出ていた。奇跡に思えた。翌春には焼けた側の枝にも若葉が出始めた。

復興に奔走していた浅山や河合節二が気づいたのはさらにその翌春だ。「いやあ、生きてんねんや。駄目かと思つた」震災から15年。炭化した肌を

ふさぐように、左右から新しい樹皮が盛り上がっている。幅28センチあった焼け跡が、今は8センチになった。「これももつとふさがって、いつかは一本の線になって、焼けたかどうかもわからんようになる。それが見たいんですよ」と河合節二はいう。

火を止めた広葉樹の話は各地にある。76年10月の山形県酒田市の大火。強風にあおられた火は市の中心部をなめ尽くし、1774棟が焼失した。その中で、ほぼ真ん中の旧本間家は焼け残った。風上にあつた駐車場と土塀、さらに駐車場のケヤキと庭のタブノキの古木が炎を食い止めて、築約2000年の武家屋敷を守ったのだ。

・東京大空襲でも多くの古木が火を止めた。東京の高校教諭唐沢孝一(67)は95年、名所探訪で寄つた湯島聖堂の一角で息をのんだ。根もことから十数層の高さまで幹の半分以上が真っ黒に炭化したイチヨウの木が、それでも葉を茂らせてそびえている。

名前があれば、愛着もわく。唐沢はこうした木を「焼けイチヨウ」と名付け、訪ね歩いた。都心だけで70本あった。近所の古老たちの記憶ははっきりはしていない。火から逃げるだけで精いっぱいだったのだ。だが、その翌春に木が芽吹いたことはみな覚えていた。

「子供の頃遊んだ木が、またよみがえって励ましてくれた」古老たちは口をそろえた。

(篠崎弘)



唐沢孝一さん